

大学の掲示板でポスターを見つけて応募しました。

日本の街は美しいですか

『将来私が美しいと思う街は、きっと日本の街である』

北海道大学大学院工学研究科  
北方圏環境政策工学専攻 水工水文学研究室  
修士1年 岩田圭佑

## 1 章 美しいと感じる街とは

### 1 - 1 . 私の住む街について

私は生まれも育ちも北海道の道産子で、幼いときからずっと、札幌市の東隣に位置する江別市で過ごしている。江別はレンガの産地として知られ、もちろんそれらを用いた建物やインフラといった物が多く存在しているが、そのことを毎日の生活で意識するようになったのはつい最近である。小学生の時の写生会でレンガの建物が課題であったことや、通学路の傍にあった旧工場の大きなレンガの煙突が、解体されて無くなったことは覚えていた。しかし、毎日の生活でレンガを意識することは中学生の時も高校生の時も、無かった。要するに、レンガは自分の記憶の中に存在していただけであった。最近では、レンガ舗装の道を自転車で走りぬける時の小刻みな「カタカタカタ…」という振動や音さえも、自分の街の個性として感じるようになった。

なぜ私の意識がそのように変化を遂げたのか。きっかけは、大学に入り、土木工学の分野を勉強するようになったことである。とりわけ自分はまちづくりや景観といった分野に興味を持ち、趣味的な範囲で勉強を始めたので、意識が変わって当たり前である。しかし、本当に大きな要因は、私の行動範囲が広がって、違う街を見る機会が増えたからに違いない。違う街を見てくることで、自分の街の個性、違う街の個性を発見できる。

この経験を踏まえると、江別においてレンガは欠かせない個性のひとつであり、アイデンティティを形成する重要な要素であることが実感できる。道の舗装がレンガであったり、バス停がレンガ造りであったりするのは、確かに見た目は美しく、レンガの街としての必然性も感じられるので良いことである。

にもかかわらず、私は何かが足りないと感じる。例えば、今観光客が江別を訪れたとする。彼らはここがレンガで有名な街であるとは実感できても、江別の街を美しいと感じることができるだろうか。江別の玄関口であろう JR のホームや駅舎に、レンガの存在感がほとんど感じられない。そこには、江別に住む人々の生活と、レンガの関わりが感じられないのである。また、レンガは、言ってしまうえば日本全国どこでも見かけることができる。この普遍性ゆえ、レンガという要素の個性だけに頼ってでは、江別の街を美しいと言うことはできない。要するに、江別はレンガの産地であることを活かしてきていないのである。

### 1 - 2 . シャッターチャンスに恵まれた街

前章で、違う街を見てくる機会が増えたと述べた。その理由のひとつに私のアルバイトを挙げる。

私はアルバイトで写真撮影を行っている。といってもスポーツ写真を専門に撮っているので、街の美しさを議論する上で直接の関係は無いが、そのアルバイトのおかげでいろいろな街を訪れることができるようになった。仕事の合間に街に出かけ、その時は趣味でシャッターを切る。首都圏の都市に行くと、駅前には、金融会社の広告だらけのビルやチェーン店の居酒屋など、違う街であるのに同じ様な光景が広がる。しかし少し奥まで歩いてみると、その街の個性を発見することもある。それが魅力的であると感じた時、私であれば、それを写真に残そうとする。

美しい街というのは、魅力的な街であり、私はそれを、シャッターチャンスに恵まれた

街と考える。写真とは、撮影者が好奇心を抱いた物や、魅力的であると感じる瞬間を残したいと思うものである。そのような瞬間に恵まれている街というのは、たくさんの魅力的な光景を体験できる街ということになる。

では、魅力的な光景とはどのようなものだろうか。たとえば景色の写真を撮る場合、それは立派な建物や橋などの、大まかに言えば見たことの無い景色であろうか。スナップ写真の場合は、人々の表情や仕草である。どちらの場合も、魅力的であると感じた景色の存在や人々の感情を読み取り、自分なりに表現することができる。写真では、その一瞬一瞬を画像に残すことになるわけで、人々はその一瞬一瞬を連続的に、景色とスナップが融合した「風景体験」として過ごしていくことになる。

よって、魅力的であると感じて撮った景色の写真が人々の邪魔によって思い通りの写真にならなかつたりしてはいけない。逆に人々の姿を撮ったスナップ写真が、建物などの景色に溶け込んでいないといい写真にはならない。景色と人々はお互いに融合していなければ、魅力的な「風景体験」はできないのである。

### 1 - 3 .「使わされる」のではなく「使う」ということ

私が訪れた、印象に残っている街の例として、滋賀県の醒ヶ井と、長崎県の島原とがある。どちらの街も周辺から湧水があり、水路を通じて住宅街を縫うように流れていた。水路沿いに水辺階段があつたり、洗い場があつたりと、そこには人々の生活と結びついた水の利用を感じることができた。水というのはレンガと比べても一層普遍性が高く、どこでもこのような利用方法を実践できそうであるが、湧水が豊富であるという理由があつてこそその必然性であるから、違和感無く住民の生活に水が溶け込んでいるのである。特に醒ヶ井は、その地域一帯を、水と生活のある風景として体験できたと感じる。行ったことは無いが、近江八幡にもいつか行ってみたい。

私の街に話を戻す。江別には確かにたくさんのレンガが見られる。しかし「風景体験」としての江別は、他の街と違う明確なアイデンティティを感じるできない。写真でレンガだけを撮っていても、物足りないのである。私は、今の江別に住んでいる人々が、使ったバス停がたまたまレンガ造りであつたとか、歩道がたまたまレンガの舗装であつたという、そんな感覚を持ってしまつてはいないだろうかと感じる。これはいわば、住民がレンガを使わされている状態である。これではレンガと人々の生活が結びつかず、「風景体験」としては物足りないのである。

ここまで負のイメージばかりを述べてきたが、江別にも魅力的な風景はある。鉄道沿いに残っているレンガの倉庫群を住民がイベント広場として使っている。お祭りで、レンガのドミノ倒しが名物になっている。住民やお祭りの参加者が、レンガを使って生活を楽しんでいる風景である。この風景は、レンガの景色と人々の姿が融合しており、魅力的な「風景体験」となることができる。

要するに、このようなレンガを使う風景が、江別で、さらに言えば江別の中のある地域で日常的になれば、その地域では普通の生活であっても、周りから見ればその地域のアイデンティティとして価値のあるものになる。公共施設の建物がレンガ造りであることは良いことだと思うが、行政がレンガを使わせるのではなく、住民がレンガを使うことが本当に重要なことではなかろうか。江別においてレンガは、行政ではなく住民の近くに存在す

べきである。

そのような観点からすると、今の江別は、レンガのある家に暮らしている人が少ない印象を受ける。それは、例えばレンガ倉庫群の様に、“群”になっていないために、街を歩く「風景体験」としてはレンガから受ける印象が少ないからであると思う。個人的な野望として、私は将来、江別にレンガの家を建ててみたい。レンガの家を建てて、そこで自分が生活する。自分だけではなくたくさんの人を誘い“レンガ住宅群”を造る。そうやって人々がレンガと共に生活を営んでいる地域を造り、広げることができれば、そういった風景の地域が、魅力的な「風景体験」の場となり、江別の街の美しさとなるはずである。

私の街を例にとって話を進めてきたが、これは日本の街全体にも言えることである。日本の街は美しいかということを考えるにあたり、その街の見た目の個性（産業や文化、地形など全て）と人々の生活が融合していることは、欠かせない要素のひとつである。その意味では江別にも、レンガ以外の焼き物や小麦といった地場産業、石狩川や原始林といった地形的特長も存在するので、江別の美しさはレンガだけに留まる必要はないのであると感じた。

## 2章 美しさを保つために

### 2 - 1 . 保護に苦しむ保護地

前章では、魅力的な「風景体験」を通して街の美しさを感じることができるという結論に至ったが、それらをいかに保護していくかも、重要な課題である。

最近様々な場面で、遺産という言葉聞く機会が増えてきたような気がする。少なくとも日本においては、明治維新から今までにたくさんの歴史的、文化的な“遺産候補”が失われてきたわけであって、先人たちが受け継いできたものを残していこうという運動が活発になってきたことは、私たちが失ってしまった歴史的、文化的価値のあるものを求めているということの現われであろう。

今、そういった価値のあるものを保護しようという動きの一方で、その地域が注目されるようになりそこに集まる人が増えた。注目されることで、住人は自分の街に誇りをもって暮らすことができるだろうが、人が集まることによって今まで維持してきた地域の歴史や文化が崩されてしまうような皮肉なことはあってはならない。また逆に、遺産登録をしたことで規制がかけられ、その地域の人々の生活自体を苦しめてしまうことも考えられる。遺産に登録されるということは、この両者の微妙なバランスを取らなければいけないという難しい問題も含んでいるのである。

### 2 - 2 . 意思統一の必要性

たとえば北海道の中標津には広大な牧場地帯に格子状に防風林が広がっていて、その地域が北海道遺産に登録されている。しかし、その防風林と牧場の運営は地域の住人の生活そのものであり、保護していくことと生活の営みとの間で摩擦が生じてしまうこともあると思う。

違う街に目を向ける。札幌市の西隣に位置する小樽市は、北海道に開拓史が置かれた頃から港町として歴史を刻んできた街である。小樽は、日本海に面して、北防波堤、南防波

堤、島防波堤に囲まれた港を持ち、背後には運河と石造りの建造物が並ぶ街があり、生活と観光が結びついた美しい街である。

小樽の場合、廣井勇氏の設計による北防波堤は北海道土木遺産に認定されている。また、運河や石造りの建造物などが建つ地域は、市が景観形成地区として指定し、さらに個々の建築物には都市景観賞を与えて、市として登録している。

この場合、北防波堤は遺産として残していくことになるが、中標津の防風林と異なり、不変性を備えている。歴史的、技術的価値も高く、これからも問題なく遺産として保護していけるだろう。また、石造りの建造物は、無理な規制はせず、基本的に所有者の自由となっている。「あなたの建物はとても価値のあるものなので市の歴史的建造物に登録されましたよ、規制は特にしないですが大切にしていましましょうね」ということである。このように規制が無い状態でも保存が成功しているのは、人々の、とりわけ小樽で暮らしている住民の意思統一がしっかりしているからではないかと思う。

小樽では以前、運河論争という出来事があった。道路建設による運河の埋め立てか、運河の保存かで、道路建設派と住民が長く争った時期があった。そのような歴史をたどってきたため、小樽の人々は街並みの保護に関して少なからず意識を持っているはずである。

要するに、歴史的、文化的価値のあるものを保存していくためには、保護の対象が半永久的に変わらない姿であるべきものなのか、姿を変えつつも保護していくべきものなのかを見極めることが重要なのである。そして、その地域で生活する人々、もしくは観光で訪れる人々の意思統一が基盤として存在することが必要である。

### 2 - 3 .「見る・見られる」の関係性

では、その意思統一を高めるためにはどうしたら良いだろうか。一つとして、地形という不変性を利用した方法があると思う。それは、「見る・見られる」の関係性を築くことである。ヨーロッパであれば、それは街中の広場に値するだろうか。広場の外側から広場を見ることができ、逆に広場に行けば外側から見られる。もちろんその逆の関係もありえる。

では日本においてはどうかだろう。ヨーロッパのような広場は少ないが、日本には日本の地形の特色を活かした視点場がある。例えばそれは市街地を囲む小高い丘や山、そこに走る坂道などである。先に述べた小樽などもそうであるが、高い場所から街を見渡すことができるのは、日本の地形の大きな特色であると思う。山と街が近ければ、山から小学生が下校する様子など、人の動きまで見ることができるのだからなお良い。

山だけではなく、河川などの開けた水辺の空間でも「見る・見られる」の関係性は成立するだろうし、例えば九州を訪れたときには海を挟んだ反対側の陸地がすぐ近くにあるようにも感じた。「見る・見られる」の関係性を築くことができる場所はたくさんある。

見ることによって、人々はその場所を認知でき、それによって改めてその場所を意識するようになる。また見られることによって、人々は注目を浴び、それによって自分とその生活環境を意識するようになる。例えばそれによって、見せることと生活を両立したまちづくりを起こすきっかけになりはしないだろうか。

[おわりに]

魅力的な「風景体験」を通して街の美しさを感じることができるということと、それらの保護には人々の意思統一が必要であること、意思統一を高める方法の一つとして「見る・見られる」の関係性があることを提案した。

幼い頃見た、残していればきっと街のランドマークになっていたであろうレンガの煙突が壊されてなくなっていく様な光景は、残念でならない。きっと日本には、そのような記憶や思いを持った街や人々の生活がたくさんあるのだろう。それを知るためにも、私はまだまだ見ていない場所、行ってみたい場所がたくさんある。残りの大学院生活、研究をしつつも写真のアルバイトでお金を貯めて、たくさんの場所を見てくるつもりである。そして将来、江別だけでなく日本の街を美しくできることに関わっていきたい。そのような決意表明の意味も込めて、『日本の街は美しいですか』という問いには、『将来私が美しいと思う街は、きっと日本の街である』と答えたい。